
涙

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

涙

【Nコード】

N7781C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

憧れの甲子園に出た達明。彼は必死に頑張った。しかし自分のミスで負けてしまい。高校野球です。こうした試合も実際にありました。

第一章

遂に来た、まずはそう思った。

涙

夏の暑い甲子園、久保田達明は新幹線に乗る前からはやる気持ちを抑えられなかった。関西に向かうプラットホームでもそれは同じであった。

「甲子園なんですよね」

「ああ、そうだ」

顧問であり監督でもある桐生先生がその言葉に応えてくれた。まだ若く四角い顔をして筋肉質の身体をしている。角刈りにしてどうにも怖そうな外見だが常に気合を強調して自分でも声を出したり変な応援歌を作ったりもするかなり面白い人でもある。学校では体育の先生でその個性と生徒思いの人柄で中々人気のある先生である。

「これから新幹線に乗ってな」

「嘘みたいです」

「俺もだ」

先生は笑って言うてきた。

「何か夢みたいだな」

「そうですね。甲子園なんて」

「しかしな、久保田」

先生はその達明に対して言うのだった。

「これは本当のことだぞ、夢じゃない」

「ですよ。俺今でも信じられないですけど」

「その証拠に何度も頬をつねっただろ？」

「はい」

その言葉にこくりと頷く。自分で自分の頬を叩いたこともある。

けれどそれでも目が覚めない。本当のことなのだ。とにかく今の自分達が信じられなかったのだ。

涙

「夢じゃないって」

「甲子園か」

先生はふと遠い目をしてした。そこに遙かなものを見ている目であった。

「俺だつてな、かつては甲子園を目指して野球をしていた」

「ですよね」

高校球児ならばそれは当然のことであった。誰もが甲子園を目指して野球をしているのだ。まさに憧れの地である。それまでにもそこから多くのドラマが繰り広げられてきたしきている。その甲子園を目指すのは本当に誰もが同じなのだ。ましてや達明達の学校といえば。

「あの時俺達はあの学校に負けた」

「やっぱりあそこですか」

「そうだ、三年の時は決勝でだった。結局負けた」

先生の言葉が苦いものになった。学生時代の苦い思い出というやつだった。達明のいる県には一つ私立で強い学校があるのだ。そこは宗教団体が母体であり全国から生徒が集まる。野球部だけでなく柔道や吹奏楽にも力を入れており全国的にも名前の知れた学校である。達明達にとっても大きな壁だったのだ。

「けれど御前達は勝つたな」

「ええ、だから」

達明は言うのだった。

「夢みたいなんです、俺達が甲子園だなんて」

「けれどな、それは全部御前達の努力の結果なんだぞ」

先生は達明だけでなく他の部員達に対しても言った。

「俺達のですか」

「そうだ、御前等朝の早くから練習して夜遅くまでやってたよな」

「はい」

「それは」

涙

皆それに頷く。頷くと今までの練習の日々が脳裏に蘇る。それは

辛いがそれでいて楽しい思い出であった。

「その結果なんだ。だから胸を張っていけ」

「胸をですか」

「そう、そしてここまで来たらな」

先生は大きく出た。達明達を鼓舞するかのように。

「優勝するぞ」

「えっ、優勝って」

「まさか」

皆この言葉には驚くしかなかった。甲子園に出られただけでも大変なことなのにこれで優勝とは。もう何と言っていいかわからなかった。

「そのつもりでいくんだ」

先生はこう言葉を足してきた。

「そうじゃないと勝てはしないぞ。それとも何か？」

不敵な笑みを作ってまた達明達に問うてきた。

「負けたいのか？違うだろ」

「それはまあ」

「やっぱり」

「そうだろ？どうせ出るんならな」

先生はまた言った。

「勝って勝って優勝だ、いいな」

「わかりました」

「それじゃあ」

「いいな、久保田」

そうしてまた達明に声をかけてきた。

「御前は一年だけれどな」

達明は一年ながらその敏捷性と技を買われてレギュラーになったのだ。小柄だが頭の回転も速くセカンドを任されている。打撃も守備も抜群の巧さがあるがそれは彼の毎日の練習によるものだ。彼は練習の虫、野球の虫だったのだ。だから他の部員達からも評判はい

い。

「頑張れよ」

「はい」

達明は先生の言葉にこくりと頷いた。そうして新幹線に乗り甲子園に向かうのだった。

宿に入ると夕食はステーキにカツだった。これは定番だった。

「敵に勝つ、ですね」

「そうだ」

部員達と同席している先生が答えてきた。

「それに力もつくからな。どんどん食え」

「わかりました。それじゃあ」

「頂きます」

ステーキにカツを食べる。それが終わると達明は宿の庭に出て素振りをはじめた。これは彼の日課である。

第二章

「今日もか」

「あつ、キャプテン」

そこに主将である鈴木国友が来た。彼はキャッチャーをしている。温厚でそれでいてしっかりした性格で人望が篤い。達明にとってもいい先輩である。

「頑張ってるな」

「何か素振りをしていないと落ち着かなくて」

達明はそう彼に答える。側の池には月が映っていてそれが幻想的な雰囲気醸し出していた。

「気がはやるか」

「はい、何か今日は特に」

「まあそうだろうな」

国友もその言葉に頷く。実は彼もなのだ。

「俺もだ」

「キャプテンもですか」

「甲子園だからな」

彼は言う。

「やっぱり何か特別な気がする」

「そうですね。俺、行けるとは思いませんでした」

そう国友に述べる。これは本音である。

「レギュラーになっただけでも信じられないのに」

「御前以外にセカンドはいないからな」

「俺以外にですか」

「ああ、皆そう思っている」

達明に対して告げる。

「御前の守備にかなり助けられてきたしな」

「有り難うございます。そう言ってもらえると」

涙

「本当のことだぞ。それでだ」

達明に顔を向けて言う。宿の明かりが背にあつて顔はよく見えな
い。だがその表情は真面目なものであるのは声からわかることだっ
た。

「甲子園でも頼むぞ」

「わかりました。俺頑張ります」

達明はその言葉にこくりと頷く。そうして彼はまた素振りをしよ
うとする。ここで国友はまた彼に言う。

「もっとコンパクトにな」

「小さくですか」

「そうだ、大振りになっている」

こう彼に注意する。

「御前にはそれは合わないからだ。だからもっと」

「鋭くしてそれで」

「ヒットを狙っていけ」

そう言うのだった。

「塁に出ればそこから仕掛けてもいいしな」

「わかりました。それじゃあ」

その言葉に頷いて振りを鋭くさせる。その振りは国友のアドバイ
ス通りコンパクトで鋭いものになった。その素振りを続けるのであ
った。

やがて開会式も終わり試合が近付いてきていた。達明は相変わら
ず練習に精を出していた。

真面目な彼は守備練習もランニングもこなしている。それが一息
ついた時だった。

「おい」

先生が彼に声をかけてきた。

「調子はいいいみいだな」

「はい」

達明は先生の言葉に元気のいい声で答えた。

涙

「何か気合が入って」

「そうか。それはいいことだ」

先生はまずはその言葉に笑顔で頷いた。そうしてそれからまた述べた。

「けれどな、気をつけるよ」

「気を？」

「そうだ、よく言われるだろ。甲子園には魔物が棲むってな」

「あつ、それ聞いたことがあります」

これは彼も聞いたことがある。昔から甲子園という場所では多くの奇跡や異変が起こっている。有り得ないことが度々起こる、それが甲子園なのだ。

「何が起こるか全くわからないんだ」

「甲子園だけはですか？」

「そうだ。阪神の試合を見る」

そうしてその甲子園を本拠地とする阪神について言うのだった。

「あのチームの試合なんて本当にどうなるかわからないだろ」

「そうですね」

達明もそれに頷いた。これもまた伝統的なものであるのが阪神の試合というのも実に筋書きがないドラマになっている。この球団の試合というのは最後の最後までどうなるか全くわからない。優勝が確実な状況で果たせなかったこともある。そうかと思えばいきなり優勝したりもする。鮮やかな勝利もあれば惨めな敗北もある。何時どうなるかわからない、阪神タイガースというチームは甲子園のドラマの中にある存在なのだ。

「それも甲子園にあるからだ」

「だからですか」

「何があっても後悔するな」

そう言ったうえで言葉であった。

「いいな」

「わかりました」

涙

達明は答えた。だが答えはしたが実はそうなるとは思っていないかった。

「何があってもですね」

「実際の、気の抜けた野球だけはしなかったらいいんだ」

先生はまた言った。これは先生の本音だった。

「それだけではですか」

「そうだ、ここまで来れたんだ」

語る目が優しくなった。甲子園に来れたということだけでかなり満足しているのがわかる。

「だからな」

「先生、けれど」

しかし達明は言う。

「優勝しましょう、絶対に」

「それはな。当然俺もそのつもりだ」

それと共にこうした気持ちも持っていた。満足していると共にさらに上を目指すというのだ。

「やるぞ」

「はい」

達明はまた頷いた。見ればもう全身汗まみれだ。汗と砂で汚れた実にいいユニフォームになっていた。

第三章

「ああ、久保田」

先生は彼のその汗を見て声をかけた。

「何ですか？」

「水分は取っておけよ」

そう彼に言う。

「脱水症状になったら元も子もないからな」

「あつ、はい」

それは言われて気付いた。今では練習中の水分補給も重要な要素になっている。

「わかりました」

「もうすぐしたら試合だ」

先生は今度は試合について述べた。

「勝つぞ」

「ええ」

そうした話をしながら夏の甲子園において練習を続けていた。そうして遂に試合となったのであった。

「二番セカンド久保田君」

達明の名前が呼ばれる。甲子園のあの黒いボードに白い光で自分の名前が書かれているのは夢のようであった。

「あのスコアボードに俺の名前があるなんて」

「まだ信じられないんだな」

「ええ、やっぱり」

そう国友に答える。

「先輩の名前もありますね」

「ああ」

国友はしっかりとした動作で応える。見れば彼は笑顔だった。

「何か俺もな」

涙

「先輩も？」

「あそのこのスコアボードに自分の名前があるのを見てやっと来たんだなってわかったよ」

「甲子園にですわね」

「そうだ、それだよな」

彼もまた同じだったのだ。甲子園で自分の名前を見てそれでやっと実感できたのだ。それは非常に大きかった。

「何かな、やっとだよ」

「そうですね。それにしても甲子園って」

達明は今度は甲子園全体を見回した。そこでまた言うのだった。

「広いですよ」

「広いだけじゃないよな」

国友も言う。

「何か。独特だな」

「はい。これが甲子園なんですか」

「雰囲気は凄いな」

観客席にはもう客が満席だった。それは二人が今まで見たことのない圧倒的な数だった。その声と熱気にもう包み込まれんばかりであったのだ。

「こんなに沢山人がいるなんてな」

「それだけでも」

「阪神の選手はいつもこんなところで試合しているんだな」

ここで先生が言ってきた。

「こんな凄いところで」

「先生」

「実際に中に入ってみると違うな」

先生も真剣な顔であった。甲子園をまじまじと見ての言葉であった。

「この雰囲気も熱気も」

「全然ですよ」

涙

「俺もはじめてだしな。ここは」

「あれっ、そうなんですか」

達明達はそれを聞いて声をあげる。それは意外な言葉であった。

「客としては何回か来ている」

「ですよね」

この先生は阪神ファンでもあるのだ。だから甲子園にも来たことがあるのだ。この球場は阪神ファンにとっても聖地なのだから。言うならば日本野球の聖地だ。

「しかし。グラウンドにユニフォームで入るのははじめてだからな」

「それだとやっぱり全然違いますか」

「ああ、何もかも違う」

そう達明に答える。

「そういう意味では御前等と同じだな」

「はじめてですか」

「そうだ。だから思い切っっていくぞ」

そのうえでまた言った。

「はじめての時はな。そうするのが一番だ」

「はい」

「わかりました」

達明も他の部員達も先生のその言葉に頷いた。それで気合が入った。

「勝っても負けても悔やむな。しかし」

「しかし？」

「怯むな」

生徒達の尻を叩くような言葉だった。そこには確かな覚悟があった。

「どんな相手でもな。いいな」

そこまで言っただけで生徒達を手招きした。ベンチの前だ。

「来い」

「円陣ですな」

涙

「そうだ。いいな」
「ええ」

皆それに従う。そうして顔を下に向けて円陣を組んで話をするのであった。

「何も考えるな」

先生はまず言った。

「野球のことだけを考える。ああしておけばよかったとかそういうのは一切考えるなよ」

「一切ですか」

「ああ、悔やむようなことだけはするな」

また言葉を出す。それこそが先生の本音であった。

「絶対にな」

「腹をくくってことですな」

「それも言う」

国友に対して述べた。

「とにかくだ。ここまで来たんだしな」

「じゃあ。悔いのないように」

「ああ、やれ。野球をな」

「はい！」

皆勢いよく頷いた。そうして円陣を解いて野球に向かう。「こうして達明も戦いに入ったのだった。」

第四章

一回表、守りに入っているのは達明達であった。いきなり達明のポジションであるセカンドにボールが来た。

ゴロであった。二塁ベースに近い場所の少し難しい位置のゴロだ。だが達明は素早くそのボールに向かい前で捕って一塁に投げる。それで何なくアウトにしたのだった。

「ナイス」

ピッチャーを務めている三年の先輩が彼に笑顔で感謝の言葉を言ってきた。

「よく捕ってくれたな」

「有り難うございます」

達明の方も礼を言った。今は確かにいいプレイだった。

一回はこれで攻撃が終わった。そうして試合は進み六回のことであつた。同点で達明はネクストバッターボックスにいた。打順が回ろうとするところで先生がそつと彼のところに来て言うのだった。

「おい」

「はい」

先生に顔を向けて応える。既にバットは手の中にある。

「何ですか？」

「今、わかつてるな」

先生はそう彼に言う。

「今の状況は」

「はい」

見れば三塁にランナーがいる。一打勝ち越しのチャンスである。しかもワンアウトだ。スクイズも犠牲フライも可能という状況である。

涙

「相手は多分御前のことは知っている」

「俺のことをですか」

「ああ、御前のバントのことはな」

彼はバントが巧いので有名だった。二番バッターになっているのもその送りバントのせいもある。だが彼はそれだけではないのである。

「相手もわかっている。それで」

「それで？」

「流し打ちのこともだ。見ろ」

またグラウンドを見るように言う。見ればセカンド、ファースト、ライトの動きが微妙になっている。達明は右バッターだ。流し打ちを警戒しているのがわかる。

「だからな。ここは」

「どうするんですか？」

「引つ張れ」

それが監督の考えであった。

「思いきって引つ張れ。それで転がせ」

「左にですね」

「ああ、わかったな」

念を押すようにして言ってきた。

「それで頼むぞ」

「わかりました。それじゃあそれで」

「これで勝てれば御前のおかげだ」

先生はにこりと笑って言うのだった。

「一回の守備も入れてな」

「いえ、それは」

しかしこの言葉には謙遜を見せる。

「俺は別に」

「大事なものは守備だ」

先生はそんな達明に対して言った。

「いつも言ってるよな」

「はあ」

涙

「だからだ。今のはよかったぞ」

「有り難うございます」

「それを今度はバッティングでもやってくれにこりと笑ったうえでの言葉であった。」

「いいな」

「わかりました。やってみます」

達明は強い顔で頷く。

「今から」

「よし、頼むぞ」

先生は彼の背中を押した。そうして彼を打席に送る。打席に入るとすぐに相手チームは内野も外野も前に出してきた。特に内野をだつた。

「やっぱりそう来るか」

達明はそれを見て心の中で呟いた。

「スクイズか犠牲フライを警戒して」

先生の言う通りだった。特に一二塁間とライトの動きが独特であった。

「そう来るのならやっぱり」

意を決した。そうして相手ピッチャーの動きを見ながら構える。

彼は粘り強い打撃でも有名であった。まさに二番バッターと言っべき存在であった。

難しい内角のシュートを思いきり三遊間に叩きつけた。するとポールは勢いよく内野の頭を越えた。鮮やかなレフト前ヒットであった。

「よし！」

先生もナインもそれを見てベンチで歓声をあげた。彼等だけでなくグラウンドからも声があがる。

「よくやった！」

「今のは！」

言うまでもなくタイムリーだった。達明は一塁ベース上でにこや

かな笑みを浮かべていた。

「この一点は大きいぞ」

「はい」

国友が先生の言葉に頷く。

「そうですね」

「あいつ、やっぱりやってくれたな」

先生は笑顔で言うのだった。

「期待通りに」

「じゃあ後はこの一点を守りましょう」

国友はそう言った。

「それで俺達の勝ちです」

「ああ、頼むぞ」

先生は会心の笑みを浮かべてそう彼に返す。

「それで俺達は甲子園初勝利だ」

「ええ」

この一点は大きかった。達明の殊勲打だった。しかし相手も必死であり負けるわけにはいかない。敵の四番打者が終盤になってソロアーチを放つ。データで徹底的に調べた弱点を衝いた攻めだといふのにそれを撥ね返されてしまったのだ。

第五章

「すいません」

国友とエースが先生とナインに謝る。

「俺達のせいで」

「いや、さっきのは仕方がない」

だが先生はそう言って二人を許した。

「今のは俺も抑えたと思った」

「そうなんですか」

「ああ。御前の投げたボールは何も悪いところはなかった」

そうエースに告げる。

「いいストレートだったぞ。それを打たれたんならな」

「はあ」

「仕方がない。だから気にするな」

また彼に言う。

「いいな」

「すいません」

「だから謝る必要はないんだ」

先生はまた二人に言葉を述べた。

「言っているだろ、悔いのないようにしろ。わかったな」

「それじゃあ」

「いいか」

ここで皆に言うのだった。

「最初に戻っただけだ。いいな」

「最初にですか」

「そうだ。後は一点だけ取れ」

そうナインに告げる。

「それだけでいいからな」

「わかりました。それじゃあ」

涙

「ああ、向かって行け」

今度はハツパをかけた。そうしてナインをグラウンドに向かわせて自分はそれを見守り続けるのだった。試合はそのまま延長戦に入りなおも流れていく。

その中で達明は今までも増して試合に集中するようになった。見事な動きでゴロもライナーも処理してバントも決める。しかし彼一人でどうにかなるわけでもなく試合は延長戦に進んだ。

延長戦になっても激しい攻防が続く。やがて達明達のピンチになった。

ツーアウトだがランナーが三塁にいる。一打で敵に追加点が入るという場面だった。

気が抜けない、達明は思った。何が何でもミスをしてはいけない。そう思っただけで守備についていた。

「絶対に」

彼は心の中で呟く。

「絶対に守るんだ、それで裏の攻撃で」

勝つつもりだった。それを狙っていた。その為にも今は何があってもミスはできない、それを何度も心の中で呟きながら相手のバッターを見ていた。

そのバッターが打った。打球は達明の方に来た。国友はそれを見せずに立ち上がり彼に指示を出してきた。

「久保田！」

立ち上がりながらマスクを放り投げる。そうしながらの言葉だった。

「バックホームだ！」

「バックホーム」

見れば三塁ランナーが突っ込んできていた。彼もツーアウトなので思い切った行動に出てきていたのだ。それは彼にも見えてきた。

「いいか！早く！」

「は、はい！」

涙

達明はすぐにそれに頷く。そうして打球を処理してホームに投げる。ところが。

打球が逸れた。高かった。国友はそれを見てジャンプした。ボールは何とか逸らさなかった。だがそれでホームを離れてしまった。そうしてその隙を衝かれたのだった。

三塁ランナーがホームインする。一点だった。追加点を入れたのは敵のチームだった。

「しまった……」

追加点が入ったのは達明にも見えていた。他ならない自分の送球のせいだったからだ。

「俺のせいで……」

思わずその場にしゃがみ込んでしまった。もう何と言っていいかわからない。

何も言えず何も考えられなくなった。試合は結局その一点が決勝点となってしまった。達明の学校は敗れ彼等がここで終わりとなってしまった。

達明もナイン達も泣いていた。しかし先生は気丈なのか泣いてはいなかった。

「よくやった」

こう言うのだった。

「御前達の試合、見せてもらった。よくやったじゃないか」

「そうでしょうか」

「ああ、そうだ」

また彼等に言う。

「いい試合だった、それでいい」

実は先生も負けて悲しい。けれどそれを必死に隠していたのだ。泣いている生徒達を励ます為にも。

第六章

「わかったな。じゃあ砂を取っていけ」

「砂を」

「ああ、折角甲子園に来たんだからな」

生徒達に対して言った。

「だからだ。わかったな」

「はい」

彼等は先生のその言葉に頷いた。まだ悲しくて仕方がなかったがそれでもベンチの前に出た。そうして砂を集めるのだった。

だが達明はまだ泣いていた。泣きながらずっとグラウンドにうづくまっている。先生はそんな彼の側に来て声をかけるのだった。

「久保田」

「すみません」

彼は泣きながら謝ってきた。

「俺のせいで」

「悔しいか」

「はい」

泣きながらまた答える。

「俺のせいで。俺のエラーのせいで」

「いや、それは違うぞ」

しかし先生はこう彼に言うのだった。

「えっ!？」

「御前だけじゃない。御前の力だけで負けたんじゃないんだ」

「俺だけじゃなくて」

「先生はいつも言ってるよな」

真正面を見据えての言葉だった。そこには一点の曇りもない。

「野球は何人でするものだ?」

「そこにいる全員です」

涙

先生は野球は九人でするものだと決して言わない。そこにいる全員でするものと言つのだ。それをここでも言つのであった。

「皆で」

「そうだ、その通りだ」

またその言葉に頷く。

「だからだ。この試合は皆が負けたんだ」

「皆が」

「それにだ」

先生はさらに言つ。

「誰もが必死に試合をした」

「皆が」

「そうだ。御前は手を抜いたか？」

「いえ」

その言葉には首を横に振つた。それだけはなかった。彼は必死に試合をしていた。それだけは本当だった。自分には嘘はつけない、だからこそ言えることだったのだ。

「それは」

「ないな。真剣だったな」

「はい」

またその言葉に頷く。

「それでいいんだ。御前は必死にやった」

先生はそれをまた言つのだった。

「それは確かだ。だから」

「はあ」

「今は確かに泣きたいだろう。しかしな」

「しかし？」

先生の言葉を聞かずにいられなかった。先生も真剣に達明に話していた。それもわかる。だからこそ耳を離すことができなくなつていたので。

「恥ずかしくない試合だった。だから胸を張れ、いいな」

涙

「胸をですか」

「勝つことも大事だ。しかしな、勝つ人間がいれば負ける人間もいる」

当然のことだがそれをあえて見ずに勝つことだけを見ている人間がいる。しかしそうではないと。今先生は言っているのだ。

「大事なものは負けても誇りを持てることだ」

「そんなことが。できるんですね」

「できる」

先生はまた言う。

「絶対にだ。しかしその為には」

「真面目にやって」

「全てを出し切れ。いいな」

「わかりました」

その言葉は達明の心に刻み込まれる。まるで魔術のように。

「じゃあ俺、また」

「またここに来るんだ」

そう達明に告げた。

「いいな」

「それでまたここで野球を」

「するんだ。今日のことはずっと胸に収めたままな」

「はい、それじゃあ」

達明は顔をあげた。まだ涙は残っていたが流れは止まっていた。

「また。来ます」

「そうだ。またな」

「はいっ」

久保田達明高校一年の夏だった。これが彼の野球人生のはじまりともなる。後にプロ野球において球史に残る名セカンドとなる彼ははじまりでもあった。

淚

淚

完

2
0
0
7
·
5
·
2
4

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7781c/>

涙

2009年7月1日21時21分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。